

1 四信五品抄の身読

身読と言えは身で読むということで、ふつうは如説修行抄の身読ということをお願いしますが、あえてここでは四信五品抄の身読という言い方をしたいと思います。

1 村田ヒサ女の場合

開導日扇聖人の時代のご信者には「信衛連」など、恐らくそういう四信五品抄の教えにもとづいた信行御奉公をされたご信者が多く居られたと思いますが、以前大放光から出た「強信者列伝」の他には過去、ご信者の伝記の類はあまりなく、一人一人の詳しいことはあまり分かりません。

それほど昔の人ではありませんが、四信五品抄の身読をした人の典型的な例としてあげたいのは乗泉寺の村田ヒサというご信者です。以前に頂いた本で感銘を受けたのですが、この欄を執筆しているうちに思い出しました。それは、昭和45年に96歳の天寿を全うして亡くなったご信者の伝記「村田ヒサ女の生涯」（昭和57年出版、発行人代表 村田英輝師）という本で、読み返して見ました。この本は「村田久女の生涯」刊行会の編集により、東京妙泉寺の服部乗達師、妙要寺の林昭行師はじめ多くの教務方と東京小岩、妙要寺の倉田ナオ子さん、村井とめ子さん等のご信者方の善意と協力によってできたもので、実に参考になることが書かれています。このようなご信者の一生を述べた本を今後、色々なお寺で出版して頂けると助かります。

村田ヒサ女の生涯こそ、四信五品抄に説かれるご信心のあり方を身をもって実行したモデルケースです。彼女は明治8年、九州の門司市で生まれ、幼い頃に両親をなくし、東京、本所の叔父に引き取られ成長、24歳の頃、清雄寺で入信、田中清歡師（後の佛立第8世講有日歡上人）のもとで「このご信心は、むずかしい理屈はいらないんだよ。ただ御題目をたくさんいただくことです。なんでも御題目から出るのだから、千遍よりは万遍と唱え重ねなさい。唱えて願いの叶わないことはない。ご弘通は現証

ですることです」(同書18頁)と経力現証によるご弘通ご奉公を教えてください、佛立信心を身につけたのです。そして、結婚、夫の勝三さんの病気が機縁で乗泉寺に移られた日歡上人と再会、夫の病気も平癒、苦勞をして夫を教化して、後に共々御奉公に精進するようになり、主として品川方面でお教化、川崎、横浜、名古屋、豊橋まで足を運び生涯1,000戸以上のお教化を致しました。また、昭和二十年から福島県の沢市に疎開、28年まで野沢、会津喜多方、五泉、石川郡浅川、村松でご弘通、多くの信徒が育ち、これがもととなり、昭和44年には村松に別院が落成し、45年には喜多方別院が寺号公称、信歡寺として開筵式を奉修するまでになり、そのほか、小岩妙要寺においても多くの現証を顕し、また、請いに応じてなくなる前年、95歳になるまで遠く佐渡までお助行を続けたということです。

同書の中に彼女の御奉公ぶりを紹介している一節を引用しますと、

“ 「日暮るれば空に満ちぬるその中に きらめく星の数は少なし」

という御教歌があるが、 私はそういうきらめく星のようなご奉公をさせていただく。日歡上人から「日本一の信者になりなさい」とのお言葉をいただいたが、そのお言葉通りでご信者の中の信者といわれるようにやらせていただくと、ある時村田さんは言ったことがあるそうである。

そのためには人に負けず、人の倍も3倍も御看経をあげる。徹夜のお助行も数知れず、御宝前に御看経をあげること3本や4本はあたり前、休みなく7本もあげることも決して珍しくなく、ご利益を頂くと御礼の御看経をまた一万遍あげるのであった。

御宝前のご祈願も、「この身は不浄なれど、戒徳はそなえずとも。御題目様の口唱の経力によってご弘通発展のために、現証のご利益哀愍納受」というご祈願で、ひたすら御題目様にすぎるのみであった。

その御題目のあげ方について、ある時、後進に

「南無妙法蓮華経を一字一字見つめながら。私を捨てて、成るもならぬもお御祖師様に一切おまかせして余念なく御題目をあげる事が大切です」

とさとされたということである。

御法を信じるのは人一倍篤く、品川時代、近辺の禅宗の坊さんがねたんでいろいろ難癖をつけた。というのは村田さんの折伏で、禅宗の信者が何人も教化されたからである。その結果、村田さんと禅宗の坊さんが問答をすることになった。村田さんの教化っ子が心配するが、村田さんは平気である。

「私には御題目があるよ、負けるものか！」と、平気な顔で出かけて行った。

相手は、どんな女がくるか、いっぺんで負かしてしまうぞと、手ぐすね引いて待っていた。相手は学をひけらかして、あれこれ言う。これに対し、村田さんは、「私は佛立講の信者、だから御題目を唱える。こんなありがたいものはない。みんなご利益をいただいている。それほどありがたいんだ」

と、ただそれだけを押し通すだけであった。相手はあきれ引き上げてしまったが、村田さんについて来た信者一同は、勝ったぞ、大勝利だぞと、おどり上がって喜んだそうである。信念の勝利といえる。村田さんは、お助行に出かけ、その家の人が忘れていた年回を告げることが再三あった。・・・・・・これも、超能力とはいえず、お看経のおかげといえる。

村田さんは折伏する時は相手を選ばない。相手が偉い人でも、インテリでも、少しも態度をかえない。相手が職人でも馬喰でも土方でも決して馬鹿にはしない。誰に対してもいつもにこやかに接し、ご利益の話をする。・・・・・・

教化する時は、病気で苦しんでいる人はいませんかと、きいて回る。お申いがあると聞くと、そこへとんで行く、亡くなった人の手をにぎり、「こんなに固くては成仏できません。御題目をあげれば身体がやわらかになります。」と、身内の人を折伏する。お看経をあげると、とたんに亡くなった人の身体がやわらかくなった。・・・・・・
特筆すべき点は、常に、その根底に、他人様をしあわせにしよう、他人様に迷惑をかけぬようにという思いがこめられていたことである。たとえば、お助行に出る時は必ず、お米、七輪、燃料の炭を持参して行った。’

(同書 34頁 ~ 39頁)

同書には、ほんの一部であるとして、実に多くの各地での現証談が収録されていますが、紙面の関係で紹介をできないのが残念です。

このような、口唱、折伏、経力、現証という佛立宗の極意は、開導聖人のご晩年のお書き物を一貫している筋で、日扇聖人全集にも常識では考えられない、経力としかいいようのないご利益談に満ちあふれています。

ご信者の例をあげたので、今度は御教務の方の典型的な例をあげます。御教務方に関しての伝記はご信者に比べれば非常に数が多く、どの方のお話しを取り上げれば良いのか迷うくらいですが、比較的新しい伝記から紹介いたします。

それは宮川日厚上人の伝記で、日厚上人は今日の九州のほとんどの寺院の開基の御導師です。伝記に従って述べますと、日厚上人は、明治11年(1878)10月20日に父、宮川福太郎、母、ヤスノの長男として広島県豊田郡で出生され幼名を角太郎とつけられました。父、福太郎は因島造船所の船大工で、ヤスノがいつの頃か、天理教に入信した影響で、福太郎も熱心に信仰するようになり、のちに、大阪堂島に大教会を設立して、その大幹部におさまるくらいでした。

角太郎は明治26年4月、16才にして大阪に出て菓子屋に入り奉公、明治29年、弱冠19才にして独立を志して、上京、赤坂に生菓子製造販売の店を構えました。1年たつ内には軌道に乗って順調だったのですが大阪で宮川船渠を設立した父、福太郎に呼び戻されて造船事業に乗り出しました。その後、事業はトントン拍子で発展、関西で一、二の実績を競うまでになり、従業員七百名を越える企業に成長しました。ところが、明治38年正月、角太郎28才の時、会社から火災が発生、全てを失ってしまいました。とうとう、会社は閉鎖となり、五年間、親子で経営者から雇われの身となって、苦勞の末宮川船渠を復活させましたが、再びその後、日本最初の鉄鋼船といわれる宮川丸の初航海の帰途、沈没により致命的な打撃をこうむり倒産をしてしまいます。

明治44年、そういう辛酸をなめられたことが一つの要因であったのか、鉄工会社を営んでいた大阪、清風寺の川上寅吉を教化親として入信を果たしました。これに先立ち、角太郎は家名を再興するには神仏に依らなくてはとの思いから、各宗を研究の末、法華経によるほかはなく、その中でも本門佛立講こそ第一であると確信された

といたします。天理教の謗法払いのために、勘当まで受けたのですが翌年には、大阪第六大歡西組の取締役の御役を頂かれました。

その後、西大歡鳥羽組に所属、大正2年には28戸の教化をして西大歡鳥羽組を分組して組長、その間、サルベージ業を営み教化につぐ教化、道場の建立を発願して1年余り、大正6年に鳥羽親会場の開筵式を執行することになったのです。

大正6年、事妙支部（現、清風寺）信行団（青年の会）の団頭に、同8年1月に事妙支部の幹事10人の内の1人に選ばれるほどでした。また、大正7年8月に大阪佛立学徒会（学徒とは在家のまま教務の役割をにない教学を学んだり御奉公をさせていただく者で開導聖人時代以来の伝統がある）が結成されると率先入会、大正9年11月にはついに意を決して3世、日随上人の徒弟として清風寺で得度式をあげ剃髪をされました。時に43才、僧名を清薫と頂かれましたが、これは子供の薫化会に物心両面にわたり尽力されたことからです。

その直後、日随上人は急に床に伏されてご容態が悪化、得度して15日目の12月12日、ご遷化をされたのですが九州方面の弘通の後継者ができ暗黙のうちに使命を委ねられたとでもいうべきなのではないでしょうか。

早速その年の末に第7世講有日淳上人の付弟（得度時は御弟子ではなく、その後の御弟子）となられた清薫師は九州方面のご弘通の御奉公のお許しを頂かれました。もともと宮川清薫師の知人であった高橋逸象氏は尼崎汽船会社の下関支店長になっており、そこに3世、日随上人が朝鮮や満州にご巡教される際立ち寄られ一夜の宿を取られたことがあったのですが、そのとき、九州弘通を高橋氏に委嘱、しばらくして使者を遣わして高橋氏に開導聖人の御本尊1幅を授与されたとのことでした。

このようにして月に1週間から10日くらい、清薫、日厚上人の下関、九州方面の御奉公が開始され、最初は高橋宅を拠点として、後、大正10年6月には大阪玉江支部の信者、石田たみいという人の世話で小倉市砂津の家を借り受け道場が発足、これが今日の不軽寺の前身、九州事妙支部仮親会場です。当時は九州には関西の各支部の流

れを汲むご信者が何戸づつか散在していましたが「掘り起こした石ころや木の根を除いていけばやがて立派な田畑になる」といわれ開拓者の精神で日厚上人は毎月の御奉公を重ねられました。そうしていくうちに各方面に次第にご弘通ができ、後に得度して不軽寺を継がれた刈茅仁助（日鏡上人）氏が高橋逸象氏の教化で入信、高橋氏とともに親会場の留守居役で入居、100戸の教化成就を条件に得度の許可を頂き、ついに達成、更に後に九州事妙支部第2代の支部長となる堀富太郎氏も入信、つぎからつぎへと入信者が相次ぎ得度者も出ました。

そして、大正13年には九州事妙支部が大阪から独立をして誕生、翌年には新しい1200坪の土地に自前の親会場が落成建立されました。

ところが、大正十四年から日厚上人は大阪事妙支部の兵庫県西宮地区の担当を拝命され、日厚上人は九州、四国、中国の出張御奉公をとともにされていたので大変に過密の御奉公スケジュールでしたが、これを少しも苦にされませんでした。

昭和2年からは西宮での本格的な御奉公が始まり、その間やはり現証ご利益により著しくご弘通が進展、昭和4年9月には西宮親会場が落成、ところが翌昭和5年、11月、火災により炎上をしてしまいました。これは上人の一代の中での最大の痛恨事で、終生お懺悔の気持ちを持ち続けられたのです。しかし、早くも昭和6年、日厚上人はじめ信者、幹部一同は懺悔改良を誓うとともに再び立ち上がり、再建を始め6月には焼失以前の親会場を上回る本堂、庫裡の建営ができ、落成を見ました。

その後も西宮に昭和14年まで上人は何度も来られていましたが、昭和7年には前、大放光編集長、西野清説、日溪上人が担任となられ、いきおい九州のご弘通に専心されるようになったのです。その結果、下関、直方、大分、長崎、鹿児島、福岡、佐賀、熊本、大牟田などの主要都市には当時の有力信者を中心に組が結成、順次親会場が建立されていきました。また、沖縄まで組が結成され上人の代理で刈茅清塔師（日鏡上人）がご奉公をされました。

昭和6年の満州事変以来、時代は軍国主義へと傾斜、その中、昭和12、3年の2

度にわたり、上人は壮大な大陸弘通を志されて満州にわたって巡回され、帰路に朝鮮のご信者をも指導され帰国されました。昭和15年5月には、朝鮮、釜山の長松寺の第4代の住職に就任され、翌昭和16年6月13日ご遷化されましたが、その弘通意欲は終生衰えることなく、上人の薫陶を受けた教務方やご信者はその遺訓を忘れることなく、戦中、戦後、そして現在までご弘通の灯を燃やし続けていて今では九州に二十か寺とその別院、門下の教務方は故人となられた方を含めれば百数十師に及び、信徒は日厚上人がめざされた5,000戸を優に何倍も上回るのではないのでしょうか。

さて、日厚上人の伝記「折伏堂 九州日厚」にもたくさんの方の現証談とご信者や教務方の思い出が掲載されています。そこで、ほんの一部だけ紹介しますと

長薫寺の野田ソマヲさんが書かれています。

「ある時は、私のお教化した人の中に悪性の眼病で、いつも青い目やにを出して、視力も殆どなく、それはひどい顔付きの娘さんがおりました。そんな具合いで、若い年頃の娘さんだということに、皆いやがって近づこうともしません。

この娘さんを上人に紹介させて頂きましたところ、上人は「それはよかった、よくこの娘さんを教化されましたネ。この眼病は必ず治りますヨ」とおっしゃって下さり、その娘さんを呼ばれて、「私のヒザに頭をのせて、仰向けに寝なさい。」といわれて、その誰もがいやがる眼を、御供水できれいに洗ってあげられたのです。

私は、上人は、このきたない目をよくぞこのようにして頂くものだと思い、泣きながら見ておりました。

余談ですが、この娘さんはその後、目は快方に向かい、今ではすっかり治って、現在は四国の方でご信心を続けておられます。・・・・・・・・・・・・・・・・

又、同じ頃のご信者に米村さんという方がおられました。この方の足はヒザから下がクサって、歩くことはもちろん、立つことさえできない。という気の毒な状態でした。そこで上人はこの方に「米村さん、あなたはこれから組長の御奉公をさせて頂きなさい」とお折伏をされました。しかし、米村さんは、このお折伏に対し「こんな

足では組長の御奉公などできましようや」といって組長の御奉公を断わられました。

すると上人は「あなたが組長の御奉公をしないのなら、その足は一生の間絶対に治りませんよ。必死になってご奉公されたら、必ず治ります」と、再度の厳しいお折伏をされました。

この上人のお折伏を、米村さんはしぶしぶながら頂かれ、組長のご奉公をされることになりました。やがて、段々と足の痛みがうすれてまいりました。そこで思い切って小倉のお寺におこもりをして、口唱祈願に励まれたところ、約五週間ほどでご利益を頂かれて、立派に立って歩くことができるようになったのでございます」この後、自分の体験談を述べて、

「こういう、種々の御法のお計らいを頂きました熊本の信者達は、御大会参詣などで小倉に行かせて頂いた折には、必ず上人にお会いして頂いて、直接お折伏を頂いて帰ることにしました。

ご遷化なさる一ヶ月ほど前のことでした。お弱りになったお身体で、市内のご奉公をして頂いての帰りの時、上人は私どもに向かって「おまえ達がいてくれたから、ここまでご弘通できた。これからは、お寺の建立のため頑張ってもらいたい」と言い残されて車中の人となられました。」

そのほか、以前、大放光誌で紹介をされた西宮、広宣寺の第3代の局長を勤められた森本佳三氏が親会場の発展に尽くされるようになった谷山幾三郎氏を昭和2年にお教化された時の現証談はまだ、記憶に新しいところだと思えますが、この伝記にも掲載されています。2週間以上もお助行を徹夜で組内を挙げてされていたが、治る気配がなく、これを聞いて谷山宅に訪ねられた日厚上人が脱疽で血の気が失せた足から包帯を取り除き、「おお、谷山さん、脈は打っておる。...もう大丈夫ですよ。あなたの病気は必ず治ります。もう痛みも薄らいで来たじゃろう。」といわれて、その通りとなり全快に至ったというのです。